

## 清水海隆先生を送る

溝 口 元

「私が一番若いと思っていたのにあなたの方が若かったんですね」とは、1983（昭和58）年4月初旬、当時、30歳の清水海隆先生と29歳の筆者が初めて言葉を交わした時のことであった。清水先生と筆者は、ともに同年1月17日に当時の文部省から設置認可を受けた立正大学短期大学部社会福祉科に4月1日に辞令を受け専任講師として着任した「同期の桜」である。

そして、短期大学部時代13年、これが改組され1996（平成8）年4月1日に社会福祉学部社会福祉学科となった以降も今日に至るまで27年、合計で実に40年間にわたって同僚として過ごさせて頂いた。さすがにあつという間とはいえないにせよ「えーもう40年」という感はある。

清水先生は立正大学仏教学部仏教学科を卒業され、文学研究科仏教学専攻の大学院へ進学、1982年3月に博士課程を退学され、4月から法華経文化研究所研究員に就任。そして、翌年から熊谷キャンパスでの勤務である。興味深いのは清水先生と筆者の1年差で教育制度が変わっていることである。1976年に「学校教育法」が一部改正されたことに伴い、清水先生が在籍された大学院制度は修士課程、博士課程だが、筆者は博士前期課程、博士後期課程であり、ともに自立した研究者となる教育を受けた。

また、2020年3月に定年退職された稲葉一洋、現・名誉教授は北海道のご出身で学園文学部社会学科に入学され熊谷キャンパス2期生として1、2年生時は学んだとおしゃっていた。しかし、清水先生は、神奈川県のご出身なので熊谷キャンパスではなく品川キャンパス、当時の大崎校舎で教養課程も学ばれている。熊谷に教養部が設置されていても品川キャンパスのみの通学で卒業が可能であった頃のことである。

さて、清水先生と筆者は40年間、同じ職場での勤務であったからといっても、会話を交わす機会は多かったとはいえないのである。清水先生は熊谷市内在住で自家用車で通勤、筆者は東武東上線の電車通勤、鷲尾祐喜義、山口雅功、現・名誉教授とは文字通り毎週、会議等の後に森林公園駅近くの居酒屋へ立ち寄っていたが、清水先生とは学科行事の歓送迎会以外で一杯ということにはなかった。

会議室以外で出会っていたのは、当時、研究室があったF館（現在の9号館）入口横に置かれていた「灰皿」であった。そこでは、どういうわけかよくシンクロして利用したものであり、一服しながら雑談を交わしていた。それも2009年にアカデミックキューブへ研究室が移転となり館内禁煙、いちいち喫煙エリアまで動くのが面倒になり結果として学内では禁煙になったという経験がある。

清水先生は短期大学部着任当初から田賀龍彦学長の秘書役・側近として大学運営を見通せる

位置にいらした。そのため、たとえば海外研修などは参加することなく一步距離を置かれていた。結果、海外研修報告には登場していないし、稲葉一洋先生の定年の際、紹介させて頂いた海外での「珍道中」（『人間の福祉』第34号、2020年）等、思い出すものはない。しかし、この間培われていたものが、学部になって一挙に開花したのであった。

長いこと同じ職場にいながら不思議なくらい会話が少なかったのは、清水先生が、社会福祉学部を代表して学園全体の運営に関わる要職に就かれ、熊谷キャンパスで出会う機会が少なかったことがそもそもの大きな原因である。2004年度から2007年度まで入試センター長を務められたと思いきや次いで2007年度から2009年度までは副学長かつ常任理事であった。年月日でいえば2004年4月1日から2010年3月31までの丸6年間である。熊谷キャンパスにフルタイム復帰されるかと思いきや2011年度から2013年度までは社会福祉学科主任、そして2014年4月1日から2020（令和2）年3月31日までは学部長に就かれ、またまた出会う機会が制限されてしまったのであった。

さて、清水先生の研究の側面をいえば、大学院時代から短期大学部専任教員になられても一貫して「瑜伽師地論」（ゆがしじろん）なる何と読んでよいかわからない難解そうな文献に取り組まれていた。発表のスタイルは当時、分野を問わず広く見られたシリーズの形をとっている。それが、学部設立に向けて1980年代末から「福田会」（1988）や現代僧侶の福祉意識についての論考（1995）を日本仏教社会福祉学会の機関誌に発表され、身延山の救護施設についての記事（1991）を宗教文化誌『法華』に寄稿された。そして、2001年には「仏教福祉の思想と展開に関する研究」と題した博士論文を学園文学研究科に提出、博士（文学）の学位を取得されている。

社会福祉学部は設立が企画された当初から特色が求められ、その一つが「仏教社会福祉」の開講であった。短期大学部には仏教関係者が3名いらしたが、どなたが担当するかの問題で白羽の矢が立ったのが清水先生であった。この科目が学部の最重要科目として大学設置審議会でも認められたことが、のちの大学院設置、なかでも博士後期課程設置への大きな貢献につながった。すなわち、社会福祉（田澤あけみ、元・教授）、仏教福祉（三友量順、現・名誉教授、清水海隆先生）、人間福祉（筆者）の3本柱としてカッコ内に示した4名にいわゆるD◎教員として「研究指導」が認められ、2008年に発足できたのである。これをもって学部の1年生から博士後期課程3年生までの教育体制が確立した。その意味で清水先生は社会福祉学部の「中興の祖」といっても決して過言ではない。

清水先生と筆者の共同作業としては2021年度に発足した論文博士請求論文の審査で、清水先生が主査、筆者が副査の一人としてコーディネートさせて頂き、それまでの課程博士3名について、初の論文博士の学位を授与することができたことがある。さらに、個人的には日蓮宗宗務院で開催される日蓮宗「ビハーラ研究会」の紹介および参加、学園大学史の論稿として新制立正大学初代学長飯沼龍遠の足跡をたどった論文（立正大学史紀要、第4号、2019）における日蓮宗の僧階の記述についての確認をして頂いた。筆者に学園「蘊奥賞本賞」への推薦をして頂いたのも清水先生であった。まさに恩人である。

2022年は学園150周年、清水先生と私の在職期間を合計すると80年、「二人で学園の歴史の半分を超えるな」などの冗談交わせるようになってきました。着任以来40年間、これまでのご苦勞をもっとも近くで拝見させて頂きました。筆者も来年度で学園を去ることになります。これで短期大学部から学部創設までの経緯を知る教員は学園からいなくなります。思い出話をする時間がやっと思えそうです。それを楽しみにもしております。本当にご苦勞様でした。